

河川環境保全と魚族の保護活動

ちんかぶ会

代 表 山 本 正 明

1. はじめに

岐阜県神岡町の中心を流れる高原川の清掃活動から始まった「ちんかぶ会」の活動も魚族保護を念頭に河川環境保全に努め、継続的に諸事業を実践している。

広く自然保護にも関心を注ぎ、深洞原生林の保護運動や山の緑を育てる植林事業への着手そして子供達を対象にした、ふるさとイワナ教室の開催も続けて行なった。一般住民への河川環境美化意識の啓蒙の為の会報の発行も発刊以来20号を数える。

私達の実践活動の積み重ねは少なくとも河川の汚染度を少しでもくい止める効果を及ぼしてきたように思える。

川本来の姿を取り戻すことが、今生きている人間の責務ではないだろうかと会員一同考えながら運動を一步一步がんばって進めるつもりでいる。

2. 活動報告

(1) 高原川清掃活動

毎月2回、第1、第3日曜日朝7時から約1時間清掃活動を実施。冬期間は積雪の為休止している。(12月～3月) 清掃活動は運動の原点として今後も継続していくことを会員同志確認し合っている。最近他団体から清掃のお手伝いの申込みなどもあって少しずつ町の中にもこの運動の輪が広がりつつある。

(2) 会報「たかはらがわ」の発行

年に3回発行。現在20号までになっている。全町民への配布を考え最近は新聞への折込みを利用している。美化意識向上への働きかけによって特に子供達への影響が多く、学校での作文等にこれらをテーマにしたものを目にする事が出来る。

(3) イワナ教室の開催

学校の授業の一環として時間を取ってもらい町内の3校で実施。神岡町内の東西両小学校と中学校で行ない、水中カメラで写したイワナの生態写真をスライドにして見ても

らうというものだ。説明のあとに子供達から質問を出してもらい会員でそれに答えた。

(4) 河川調査の実施

水生生物による調査を過去に何回か行なっているが、今回は小学校の子供達と実施。西小学校のつりクラブの子供達20人と担当の先生達も合同で市街地の上流、中心部、下流の3カ所で水生昆虫を採集し、捕獲した虫を分類し川の汚れ具合を調査。

(5) ふるさとふれあいの^も森林への参加

国有林の一部を借り受けて植林から手入れまで行なう、分収造林へ着手してすでに8年経過。木を育てていく事を体験しながら自然の仕組みを肌で感じてもらうということだ。下刈作業年数も終了しスギやヒノキの背も2メートル程に生長してきた。学習林として将来多目的に利用していく計画でいる。

(6) 深洞原生林保護運動

地元の自然愛護グループや当ちんかぶ会の要望で原生林の伐採が中止された。すでに報告した通り保護林の指定がなされ貴重な自然が残されることになったが、周辺の伐採計画や一帯周辺の開発計画も上ってきており今後も厳しく観察行動を取り続けていくよう計画している。

(7) 学習会兼例会の開催

毎月1回例会を開き、会員相互の情報交換や話し合いを行なっている。年に1～2度は講師例会を企画。地元の郷土史や地質学に詳しい先生を招き勉強会を行なっている。また夏8月例会には鮎例会と称して河原で会員の釣り上げた鮎を食べながら会員の家族も含め盛大に行なっている。毎月の会費1人1,000円はこの例会時に集金される。

(8) 他団体との合同事業に参加

神岡名水を守る会が出来た。これは名水岐阜県の百選の1つに神岡町の湧水群が選定された折りに観光協会を中心に関連団体が加わって出来た会である。国道脇にあった湧水を引き木の水おけで受ける水屋の作業に会も協力労力奉仕をした。また町内にある昔からの共同水屋の保存運動にも力を注ぎ名水神岡の売出しに協力。そして2年前から新しい企画で生まれたイカダ下りがお盆の帰省客で賑う時に盛大に行なわれ、15のイカダが夫々の団体に創意工夫し川を下った。ちんかぶ会も企画当初から参画し、オープン参加の形で美化を訴えたイカダで川を下った。

(9) 北アルプス淡水魚保護観察センターの建設を目指して

減少傾向にある天然魚の保護を考えていく上で河川環境悪化の防止が先ず第1にあげられるが、何とかして天然魚そのものを増殖することが出来ないだろうかとこの考えからセンター建設の構想が生まれた。しかしながら条件に合う場所がいざ搜すと中々無く、思案の日がつづいた。谷水が清流でしかも水量が安定してそのうえ池を設置できる場所を確保できる場所は山国でも少ない。市街地から5、6分の近距離で谷川の側に休耕田があるのを見つけ早速地主にお願いし借り受けることが出来た。ここに池を作り、天然イワナを放流し自然増殖が出来れば元の河川へ放流するを夢にみて建設準備に取りかかっている。

(10) 河川環境保全への積極行動

ダムによる河川の寸断は本来の河川の姿から程遠い状況を生み出している。今ダムのない長良川の河口せき建設着工が大きく問題化している。高原川でも冬期間ダムから一滴も水を出さないダムや年間放水ゼロのダムがある。これらのダムはそれぞれ水利権があって電力会社が国との契約で有している。またこの契約期間が30年程あり一旦施行されるとその間何も言えないのが実態である。従ってこの契約期限がきているダムについて放水してもらうよう電力側に対し要望書を提出し働きかけている。水なし川には魚族にとって致命的であることを考えると河川や魚族保護の立場の人間は大いに立ち上って多くの仲間と声を大にして主張すべきではなかろうか。(要望書提出の詳細は後述)

3. ダムに対する考察と要望

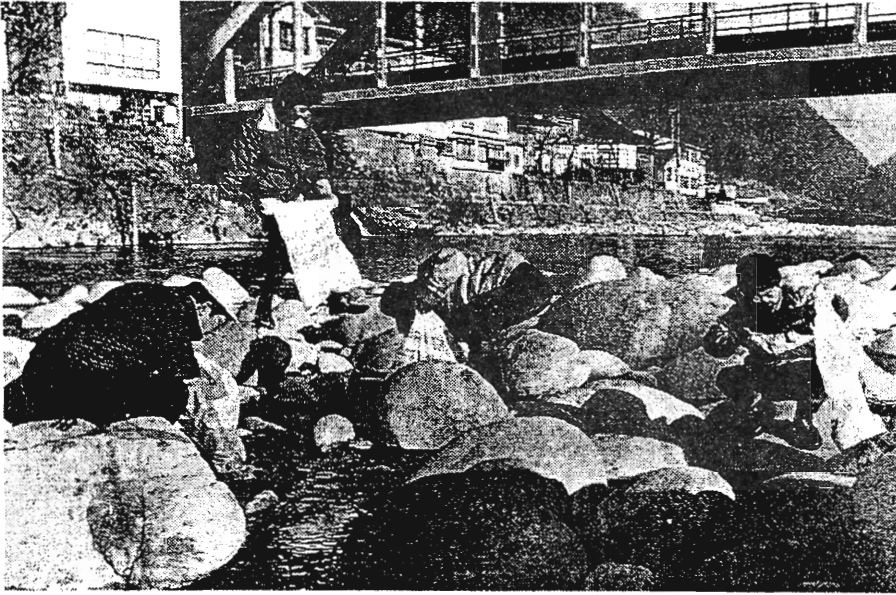
日本のダムは戦前戦後をはさみ数多く建設された。日本の産業の隆盛を願い又電力需要に応える為日本中の川がダムによってせき止められた。現在数多くのダムは土砂に埋まり水位が上って洪水の時などは周辺住民の不安をかりたてている。ゲートを上げ水位の調整をしているとはいえ半分以上もたまった土砂は動かない。^{しゅんせつ}浚渫するにも多額な金がかかるため今のところは表面的にある水を電力用として利用しているのが実態である。渇水期になると下流へは流さずすこしでも電力用として確保したいのが本心であろう。ダムを効率的に運用できない時期に下流へ水を流せとの声は電力側にとって耳の痛い話であろう。しかし川そのものの権利は元々国民のものであり、公共公益事業とはいえ電力会社のみの権利だとは決めつけるわけにはいかない。また漁業権を有する各河川の漁協のみのものでもないといえよう。流域住民の自然環境でもあり水に住む生き物達のものである事にも目

を向けてもらわなければいけない。63年に北陸電力の新猪谷ダムから大量の土砂が流出し下流数キロにわたり土砂で埋った事件に対してもちんかぶ会は逸早く抗議の要望書を提出し、善処を要求した。このダムは平成2年3月31日をもって水利権の契約期限がきて更新となる。このダムは年間放水ゼロのダムである。この時期に会として発電に支障のない程度の水を流してほしいとの要望をしようとしている最中である。ダム下流数キロにわたって水なし川の呈をなしむき出しの岩でゴロゴロしている。建設省の河川維持流量の概念として流域面積100km²に対し0.1~0.2t/秒の水が流れているというのが基本としてある。しかし現実的には色々な条件等によってこの指導基準も力をもたない。最終的には地元住民との話し合いで解決して下さいとの逃げの一手である。電力会社では従来から補償名目で地元漁協へ金を渡している。これで全て終ってきたくところが最近環境権を声にして川の水を呼び戻そうと運動が展開され金の問題で解決つかない局面に電力側のとまどいを感じられる。河川を全ての人と生き物の為に考えてほしい時代がきた。

4. おわりに

ちんかぶ会の活動の原点は汚れた河を美しくするためにはじまった奉仕活動が魚種調査や広く自然に対する保護へと、むけられていった。自然から受ける恩恵を当り前のものとして享受して自然に対して無策でありつづけてきた事に対する反省を今するべきではないだろうか。

多くの事業内容はこれらの反省から立てられたものであり、これから起こりうる諸問題に対しても同じ考え方で対処していきたいと考えている。今後も一層会員同志お互いに勉強しながら理解ある周囲からのご協力をいただきながら各活動の推進を図っていきたい。



雪解け水に春のぬくもり

高原川清掃開始 冷たさにも笑顔

神岡町の「ちんかぶ会」

吉城郡神岡町民でつくる自然愛護グループ・ちんかぶ会(山本正明会長)の高原川清掃が二日から始まった。八年目の奉仕作業で、雪が降る十一月まで続けられる。

同会は岡町と上宝村を流れる高原川を、淡水魚のチンカブ(カジカ)が泳ぎ回れるような、かつての清流にしようと昭和五十七年に結成された。

四月から十一月まで毎月二回の清掃活動を中心に、流域住民に川の浄化と郷土愛をアピールしている。

清掃は午前七時から西里橋下の高原川一帯で行われ、会員の親子が長靴に手袋姿で、半年間にたった空き缶やビニール袋、釣り人が放置した釣り糸などを拾った。雪解け水が流れる川だが、親子たちは冷たさを楽しむように水に手を入れていた。



高原川に生きる魚の生活を児童に紹介する徳田幸恵さん＝神岡東小学校

地元の人が先生役

食事や産卵 スライドで

郷土の自然に触れる「ふるさとの魚教室」が十五日、吉城郡神岡町の神岡東小学校(森本英治校長)で開かれ、

児童たちが古里にすむ魚の生活を学んだ。
地域の人たちを先生に招いて開く勉強会で、同町を流れる高原川の清掃活動が続いている自然愛護グループ・ちんかぶ会(山本正明会長)が招かれた。
魚教室には五、六年生百三十四人と教諭が出席。先生は同会会員で三重大学水産学部を卒業して淡水魚の生態写真を撮り続けている徳田幸恵さん(三セ工同町殿本町)。
高原川と支流の双六川など同町周辺で撮影した魚の水中写真を中心に七十六枚のスライドを使用して、同川水系に生息するイwana、カシカ、コイ、アジメドジョウ、ヨシノボリなどの淡水魚を紹介。さらにイwanaの生態写真でふ化

からえさを食べる行為、けんか、産卵行動など水中で繰り返される魚たちの一年の暮らしを分かりやすく説明した。児童からは魚の年齢や卵の数などについての質問が出た。

古里の魚の生態学ぶ
神岡東小

平成元年6月16日 岐阜新聞

高原川も「合格点」

神岡西小児童が水生生物調査

ヒル見つけ数河は心配

7/1、8、12(金)

川の汚れの指標となる水生生物調査が十日、吉城郡

神岡町の高原川で行われ、小学生が川底の生物を観察しながら点検した。

水質保全の大切さを子供たちに伝えるため高山保健所が企画した。調査地点は市街地上流の数河、市街地の西里橋、下流の牧の三カ所で、神岡西小釣りクラブの十七人が協力。川底の石に付着している生物を採取して水の汚染度を調べた。調査では七種類、七百六十八匹の水生生物を採取した。ヒゲナガカワトビケラ

を筆頭にきれいな水にいとされるブユ類やカワゲラ類が三カ所とも採取され、高原川がきれいに保たれていることが分かった。しか

し、数河と西里橋の川岸近くではヒル類が見つけられ、付近にやどむ水の汚染が心配された。



水生生物を調べる神岡西小の児童たち
＝神岡町西里橋

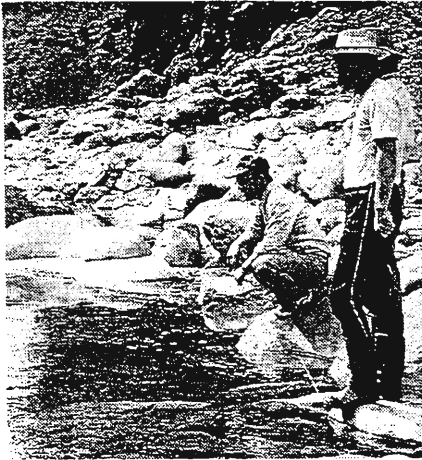
平成元年8月12日 岐阜新聞

63.5.22
(山)

下流川岸に土砂蓄積

放水後の高原川を視察

岡町の会
神ちゃんかぶ



高原川の土砂たい積状況を見るち
んかぶ会員ら＝神岡町横山

吉城郡神岡町の自然愛護団
体・ちんかぶ会（山本正明会
長、二十四人）は二十日、北
陸電力新猪谷発電所ダムから
の土砂大量放出で砂がたい積
している高原川を視察した。

同会は高原川を淡水魚のチ
ンカブ（カシカ）が泳ぎ回る
の渚水塔建設工事開始前か
ら

工事による河川への影響を考
え、工事の経過や工事後の河
川を見守り続けてきた。その
結果、同ダムの下流が六・余
りにもわたって砂で埋まり、
河川機能を失わせるほどの被
害が出ていることが分り、
北陸電力に河川環境の回復を
求め、同社から自然洪水で回

復しなかった場合は人為的に
回復させるという回答を得て
いる。

このため同会員らは視察を重
ねており、今回は工事から三
月たち今月中旬の降雨で同
ダムから毎秒二百リ以上の放
水があったため放水による回
復状況を見た。

砂は全般的に下流に移動し
ているため新たに下流の川岸
に砂がたまり始めた。特に砂
が多い千貫橋下は流れの強い
個所だけ砂が減少していたが
依然としてたい積している。

水中の石が砂で磨かれており
水生昆虫は全く見られなかつ
たとしている。

同会は今後も監視を続ける
こととしている。



西校児童による「水生生物による水質調査」



北アルプス淡水魚保護センターの池づくり
(天然イワナ増殖)



「ふるさと・ふれあいの森林」の下刈りの時に
ミニ森林教室を開催（神岡営林署）